

教員研修の充実

－授業研究を主体とした校内研修の改善－

隈元 浩二郎〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
大久保 直志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Substantiality of the Teacher Training

－On Improvement of the Teacher Training in School on the Basis of Class Study－

KUMAMOTO Kojiro・OKUBO Naoshi

キーワード：バランス、模擬授業、授業研究、課題焦点化型

1 はじめに

近年、少子高齢化や高度情報化、国際化などが急速に進む中、これらの教育環境を取り巻く状況の変化等を踏まえ、平成18年12月、教育基本法が改正され、新しい時代の教育理念が提言されるとともに、平成20年3月、改訂学習指導要領が告示された。そこでは、子どもたちが自立し、また、自らを律し、他者とも協調しながら、その生涯を切り開くことができる力を育成すべく、現行の学習指導要領で示されていた「生きる力」の基本理念を継続・共有することが確認された。

さらに、これからの知識基盤社会やグローバル化の時代を担う子どもたちには、知・徳・体の調和か取れ、生涯に渡って自己実現を目指すことができる主体性を身に付けさせるとともに、確実に自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しながらも一定の役割を果たすことができる力を身に付けさせるなど、これからの険しい人生を生き抜くための力を獲得することの重要性が示されている。それらの実現のためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを活用して課題を見出し、解決するための思考力や判断力、表現力等の能力など、キー・コンピテンシー（主要能力）の獲得を重視した教育の改善・充実こそが不可欠となってくる。

また、改訂学習指導要領では以下の三つの要素を児童生徒一人一人に確実に身に付けさせることの重要性を示唆している。しかも、三つの要素の習得に当たっては、偏りが生じてはならない。これからは、三つの要素のバランスを重視した取組

を工夫・改善することが求められる。

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- ③ 学習意欲の向上や学習習慣の確立

そこで、本稿では授業研究を主体とした校内研修の改善・充実に焦点を当て、教員個々の資質向上を実現するための糸口を模索したい。

2 教員研修研究の経緯

(1) 模擬授業の導入

平成18年度、鹿児島大学教育学部では文部科学省の委嘱を受け、鹿児島県教育委員会と協働で「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」事業に取り組んだ。このプロジェクトは「協働的授業研究に焦点化した教科指導力向上研修プログラムの構築」と研究テーマを設定し、調査研究等の実施や教員研修の開発に取り組んだ。

特に、教員研修の開発においては授業研究を主体とした校内研修の在り方に焦点を当て、授業研究そのものの質の向上に取り組んだ。ここでは、鹿児島県が平成16年度、17年度に実施した「基礎・基本」定着度調査結果から課題を模索し、わかる授業の実現に迫るとともに、一方では教師の指導法の改善に注目し、模擬授業を導入した授業研究の開発などに取り組んだ。

模擬授業においては、大学の教員が授業者を担当し、参加者の教員が児童生徒役を担うことで、新しい視点からの気付きや発見、着眼点などを獲

得ることができた。また、模擬授業を題材として行った協働的授業研究では、大学教員の授業者と鹿児島県教育委員会、鹿児島県総合教育センターの三者で授業研究の進行・運営等の役割を分担するとともに、参加者と児童生徒目線で活発な質疑応答や意見交換などが展開された。特に、授業設計の新たな視点や教師の力量形成など、日頃の授業研究では得ることができない新しい視点での気づき等が成果として得られた。

さらに、模擬授業や協働的授業研究を通して得られた知見を基に取り組んだワークショップでは、普段は授業者しか得ることができない成果等を参加者全員で共有し、学習過程の改善や学習課題の設定など、具体的な授業デザインの構築のための授業研究の活性化を実現するといった活動的な「ワークショップ型授業研究」を実現することができた。

(2) 模擬授業の発展

平成19年度は、独立行政法人教員研修センターの委嘱を受け、「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の採択事業に取り組んだ。このプロジェクトでは、模擬授業とワークショップ型授業研究をセットで取り組むことで、「授業改善能力」や「研修指導能力」の育成、評価の在り方などに焦点を当て、前年度の取組をより一層発展させるべく、模擬授業を主体とした授業研究の改善やそのモデルカリキュラムの開発に取り組んだ。

模擬授業の実践においては前年度の国語科、数学科、英語科の3教科に、社会科、理科、技術・家庭科の3教科を加え、計6教科で教員研修の充実に取り組んだ。また、課題の焦点化についても継続して「基礎・基本」定着度調査を追跡し、明確な課題意識を共有して授業研究に取り組むことができた。

さらに、研修指導能力を明確にすべく、第1回目の教員研修会で実践した模擬授業や授業研究をとらえ、授業研究の場で研修指導能力を発揮するスタイルを5つの型(表1)に分類し、意図的・計画的な研修指導能力の獲得を模索した。

比較・検討型

研究テーマや題材などに基づき、授業者並びに参観者(関係者)が略案を持ち寄るとともに、授業者が代表して(模擬)授業を提供する。そして、提供された(模擬)授業を参考にしながら相互の略案の共通点や相違点などについて検証したり、意見を交換したりする。

このように、複数の略案を比較・検討することで、望ましい授業アイデアを模索することができるとともに、他者の着眼点も今後の授業設計の参考にすることが可能となる。

課題焦点化型

授業研究をスタートさせる前に、参観した(模擬)授業について気になる課題や授業研究で話題として取り上げたい内容についてアンケート調査を実施する。そして、授業研究ではアンケート結果の中から、特に希望の高かった2~3の課題に絞って改善策を提示したり、課題に対する個々の意見を交換したりする。

このように、共有したい課題についてすぐに意見を交わすことができるので、無駄を省いて要点にのみ時間を割くことができるとともに、深まりのある授業研究を展開することが可能となる。

部分検証型

授業者が提示した指導案を事前に共有し、模擬授業や授業研究で取り上げたい内容や過程についてアンケート調査を実施することで、授業研究で注目する部分や課題を確認・把握しておく。そして、研究授業では授業者がまず課題部分について模擬授業を実施・提案する。次に、授業研究の場で実施された課題部分の模擬授業を検討し、出された意見等をその場で集約するとともに、その改善案を基に、再度その部分だけを模擬授業のスタイルで授業者が実践し、その改善案の効果等を検証して意見を交換する。

このように、事前に共有した指導案の課題部分を検証し、繰り返し改善・実践することで、より高い指導技術を習得することができるとともに、望ましい指導案に仕上げるのが可能となる。

ビデオ検証型

授業者の提示した指導案を事前に確認し、授業者の授業イメージを共有しておく。(模擬)授業においては、その様子をビデオで録画する。そして、授業研究では撮影した授業記録を再現しながら課題点等を検証し、その改善策を模索する。また、必要に応じて撮影したビデオを繰り返し再生し、具体的な改善策等を出し合い、部分的な模擬授業を繰り返すことで検証を積み上げる。

このように、映像を確認しながら課題等を把握することができるので、具体的な指導法の改善につながるとともに、授業者個々の癖等も発見しながら力量を高めることが可能となる。

多視点追究型

授業者の専門教科に関係する参加者だけでなく、他教科や他職種、保護者などの部外者の参加予定者に対して事前に指導案を提示しておくとともに、授業の見所やポイント、課題などを前もって示しておく。併せて、(模擬)授業においては、授業の様子をビデオで録画しておく。そして、授業研究においては、事前に提示しておいた授業の見所やポイント、課題などを中心に、質疑応答を展開する。また、必要に応じて関連するビデオ映像を再生しながら質問や意見を交換する。

このように、門外漢の参加者の方々から率直な意見や感想をいただくことで、新しい発想や着眼点を得ることができるとともに、分かりやすい授業の説明の実現につなげることが可能となる。

表1 授業研究の5つのスタイル

授業研究のスタイルを、授業研究のねらいや目的、意図などに応じて対応することで、これまでの紋切り型になりがちな授業研究の展開等を改善したり、活性化させたりするとともに、時間の節約や実施回数の増加、参加者の意欲高揚など、幾つかの成果を基に、各教科ごとにモデルカリキュラムや評価基準に基づくルーブリックを作成することができた。

3 模擬授業の実用化

平成20年度は、過去2年間の成果と課題を受け、本学部附属教育実践総合センターの教員研修研究部門を中心に、授業研究を主体とした校内研修の改善について、継続して研究に取り組むことにした。

- (1) 授業研究を主体にした校内研修や模擬授業等の取組に関する実態調査の実施
- (2) 学校現場における実用化を念頭に置いたモデルカリキュラムの部分実証
- (3) 授業研究の5つのスタイルの活用場面や方法、相互関連などの研究
- (4) 学校現場の教師による実践・検証
- (5) 教材の特質や現場の実態に即したルーブリックの改善

なお、本稿ではこれまでに調査研究や研究実践、検証などに取り組むことができた(1)、(3)、(4)の項目について述べる。

4 実態調査の実施

平成19年度は、2回の教員研修会に取り組み、のべ11教科の模擬授業とワークショップ型授業研究を提供した。しかしながら、事後アンケートや追跡の電話調査の結果を見ると、模擬授業へのチャレンジに対する意欲面の高揚は確かな手応えとしてとらえられたものの、学校に戻って実際に実践に移すとすると、同僚の説得や時間の確保などが解決できたとしても、なかなか実施に至るまではまだまだハードルが多く、実用化の難しさを実感した次第である。

そこで、実用化に対する課題を探るために、鹿児島県下の公立小・中学校における校内研修の実態、とりわけ授業研究を主体にした校内研修や模擬授業等の取組に関する実態調査を実施することにした。

(1) 実態調査の方法等

ア 実施時期

平成20年4月～7月

イ 調査対象

【小学校】 県下公立小学校 15校

【中学校】 県下公立中学校 15校

計 30校

ウ 調査対象及び方法

各学校の校長もしくは教頭、教務主任、研修主任等から電話の聞き取りで実施

エ 調査項目

調 査 内 容
① 授業研究を主体とした校内研修が、教育課程（年間計画、全体計画等）に位置付けてありますか。
② 授業研究を主体とした校内研修は、1年間に何回位置付けてありますか。
③ 先生方は、授業研究を主体とした校内研修に意欲的に取り組んでいますか。
④ 本年度の授業研究を主体とした校内研修を、改善する計画がありますか。
⑤ 研究授業を実施する前に、他の学級で同じ内容の授業を実施した例がありますか。
⑥ 研究授業を実施する前に、模擬授業を実施した例がありますか。
⑦ 模擬授業を活用して教科部会等を実施した例がありますか。
⑧ 模擬授業は、校内研修に活用できると思いますか。
⑨ 模擬授業を校内研修に取り入れたいですか。
⑩ 模擬授業に対する御意見をお聞かせ下さい。
⑪ 授業研究は、どのように展開していますか。
⑫ 授業研究の展開に関する御意見をお聞かせ下さい。

表2 実態調査の内容一覧

(2) 実態調査の結果等

① 授業研究を主体とした校内研修が、教育課程（年間計画、全体計画等）に位置付けてありますか。
--

「位置付けてある」

【小学校】 15校 ～ 100%
【中学校】 15校 ～ 100%

考察

小・中学校共に授業研究を重視し、研修の中心に据えて取り組んでいることが分かる。

② 授業研究を主体とした校内研修は、1年間に何回位置付けてありますか。

【小学校】 3～6回, 3.5回/年
【中学校】 2～5回, 2.9回/年
小・中学校 平均 3.2回/年

考察

実施回数は年に3回から4回程度で、最低でも各学期に1回程度は実施している。また、小学校が中学校を大きく上回るのではないかとされたが、鹿児島県が取り組んでいる「中学校学力向上推進事業」の実践（中学校の国語、社会、数学、理科、英語の5教科の教員は、3年間の間に1回以上研究授業を実施する取組で、今年度が最終年度に当たる）が大きく影響していると思われる。

③ 先生方は、授業研究を主体とした校内研修に意欲的に取り組んでいますか。

「とても意欲的に取り組んでいる」

【小学校】 6校 ～ 40%
【中学校】 4校 ～ 27%
平均 5校 ～ 33%

「おおむね意欲的に取り組んでいる」

【小学校】 7校 ～ 47%
【中学校】 8校 ～ 53%
平均 7.5校 ～ 50%

「もう少し意欲的な取組を期待したい」

【小学校】 2校 ～ 13%
【中学校】 3校 ～ 20%
平均 2.5校 ～ 17%

「意欲的な取組とは言い難い」

【小学校】 0校 ～ 0%
【中学校】 0校 ～ 0%
平均 0校 ～ 0%

考察

8割以上の小・中学校が授業研究を重視し、精力的に取り組む姿勢をもって研修に臨んでいるこ

とが分かる。すべての学校の回答の感想に、教員の意識が高まり、前向きの内容が添えられた。

④ 本年度の授業研究を主体とした校内研修を、改善する計画がありますか。

「ある」

【小学校】 5校 ～ 33%

【中学校】 1校 ～ 7%

平均 3校 ～ 20%

- 回数を増やす。(小、中)
- 小・中合同で実施する。(小、中)
- 指導助言者の外部招聘を増やす。(小、中)
- 先輩の模範授業を実施する。(中)
- TTやゲストティーチャーで実施する。(小)
- 研究指定を引き受け、研修体制を変える。(小)

「ない」

【小学校】 8校 ～ 54%

【中学校】 13校 ～ 86%

平均 10校 ～ 70%

「その他」

【小学校】 2校 ～ 13%

【中学校】 1校 ～ 7%

平均 2校 ～ 10%

- その都度改善して、次に備えている。
- 現在、改善中である。
- すでに改善した。

考察

改善に取り組んでいる学校のほとんどが、資質向上を念頭に置いて取り組んでいる。改善に取り組む動機は、外部とのかかわりの中で生じたものがほとんどである。PDCAサイクルでの見直し・改善を期待したい。

⑤ 研究授業を実施する前に、他の学級で同じ内容の授業を実施した例がありますか。

「ある」

【小学校】 13校 ～ 87%

【中学校】 9校 ～ 60%

平均 11校 ～ 73%

- 研修部が計画して実施している。

- どの職員も積極的に取り組んでいる。
- 他教科の教員も協力的である。
- 可能な限り実施するようにしている。

「ない」

【小学校】 2校 ～ 13%

【中学校】 6校 ～ 40%

平均 4校 ～ 27%

- なかなか時間がとれないようだ。
- 進呈の調整が難しいようだ。

考察

小学校では、担任制なので自己調整がやりやすいのに比べて、中学校は教科担任制により、進呈調整やゆとり時間の確保がなかなか上手くいかない傾向が窺える。

⑥ 研究授業を実施する前に、模擬授業を実施した例がありますか。

「ある」

【小学校】 13校 ～ 87%

【中学校】 9校 ～ 60%

平均 11校 ～ 73%

- 個人や気心の知れた者同士で実施している例はある。
- 可能な限り実施するようにしている。

「ない」

【小学校】 2校 ～ 13%

【中学校】 6校 ～ 40%

平均 4校 ～ 27%

- なかなか時間がとれないようだ。
- 進程の調整が難しいようだ。

考察

小学校では、担任制なので自己調整がやりやすいのに比べて、中学校は教科担任制により、進呈調整やゆとり時間の確保がなかなか上手くいかない傾向が窺える。

⑦ 模擬授業を活用して教科部会等を実施した例がありますか。

「ある」

【小学校】 1校 ～ 7%

【中学校】	1校	～	7%
平均	1校	～	7%
○ 部員間で取り組んでいる教科もある。			
○ 模擬授業を通して、若い先生の面倒を見ている学年主任がいる。			
「ない」			
【小学校】	14校	～	93%
【中学校】	14校	～	93%
平均	14校	～	93%
○ なかなか時間がとれないようだ。			

考察

学校規模や教職員の定数の関係で、組織で取り組むには難しい状況のようである。

⑧ 模擬授業は、校内研修に活用できると思いますか。

「思う」

【小学校】	15校	～	100%
【中学校】	13校	～	87%
平均	14校	～	93%
○ マネリ化を防ぐ手段として、大きな効果が期待できる。			
○ 日常化につなぐ新しい研究スタイルだ。			
○ 手軽に取り組めるようになるといい。			
○ 資質向上のためのいい手だてだと思う。			
○ 部分的に用いても効果があると思う。			
「ない」			
【小学校】	0校	～	0%
【中学校】	2校	～	13%
平均	1校	～	7%
○ なかなか時間がとれないようです。			

考察

模擬授業の効果については大きな期待が寄せられている。実態に応じた活用が期待できる。

⑨ 模擬授業を校内研修に取り入れたいですか。

「取り入れたい」

【小学校】	1校	～	7%
【中学校】	1校	～	7%

平均	1校	～	7%
○ 教育実習の指導でよく活用していたが、工夫次第で研修に使えると考えていた。			
○ 採用試験の手法の一つ。新採の研修などに効果が期待できると思う。			
「活用を検討したい」			
【小学校】	14校	～	93%
【中学校】	14校	～	93%
平均	14校	～	93%
○ 教育課程の編成の際に考えてみたい。			
○ 部分的に使う方法があるのかもしれない。			
「特に必要性を感じない」			
【小学校】	0校	～	0%
【中学校】	0校	～	0%
平均	0校	～	0%

考察

現在の現場の状況では割り込む余地はなさそうなので、現行の教育課程の整理や校内研修の全体計画や組織の見直し、年間計画の再検討など、取り込む余地をつくる作業が必要であるとする考えが多く寄せられた。また、モデル的な取組を示すことも必要であると思われる。

⑩ 模擬授業に対する御意見をお聞かせ下さい。

【小学校】

- 職員間に、模擬授業に取り組もうという雰囲気生まれれば、理想的な学校になると思う。
- 研究授業をこなすことが第1の目的となっているので、模擬授業という発想自体が生まれにくい状況である。
- 若い先生にとっては子どもに授業するより、模擬授業の方が逆にプレッシャーが大きいのではないかと思う。

【中学校】

- 職員一人一人が多忙で、模擬授業に取り組むゆとりのないのが現状である。
- 現場の職員が、模擬授業の何たるか、そのものの効果ややり方など何も分かっていないのが現状だと思う。
- 模擬授業では必要な部分だけを実施し、その

他は省略できるので、ポイントさえ共通理解できていれば、極めて効果的な校内研修になると思う。

考察

模擬授業の必要性や効果などの意義を実感させるとともに、模擬授業を活用することが個々の資質向上につながるという意識改革に取り組む必要があると思われる。そのような風土に近付けるためにも、模擬授業を主体とした校内研修のモデル等の開発・提示が不可欠となる。

⑩ 授業研究は、どのように展開していますか。
「授業者の反省→質疑応答→意見交換→指導助言」

- 「いつもこの展開で実施している」
 - 【小学校】 10校 ～ 67%
 - 【中学校】 13校 ～ 87%
- 「検討課題を設定して実施している」
 - 【小学校】 2校 ～ 14%
 - 【中学校】 1校 ～ 7%
- 「ターゲットの児童生徒を設定して実施している」
 - 【小学校】 2校 ～ 7%
 - 【中学校】 0校 ～ 0%
- 「その他」
 - 【小学校】 1校 ～ 7%
 - 【中学校】 1校 ～ 7%

○ ビデオの活用、指導案の持ち寄り、講師等の模範授業の提供など

考察

現場の教員の中には、いつもの展開ではない運営のアイデアをもった職員が多く内在しているのではないと思われる。ぜひ研修テーマのひとつに「授業研究の展開の在り方」を設定し、研究を深める必要があると思われる。

⑫ 授業研究の展開に関する御意見をお聞かせ下さい。

【小学校】

- アンケートにある「反省→質疑→意見→助言」という展開には昔から疑問を感じていた。事前に課題や目的を明確にしておくことが大切だ。
- 研究授業→授業研究となると仰々しくて、これからという時間になったところで、いつも時間切れである。負担の大きさに加えて、延長や再開ができないので、研究公開などは敬遠されるのだと思う。
- 参加者全員がためになり、日々の授業につながる授業研究を展開したいものである。

【中学校】

- 昨年末の教員研修会に参加して、授業研究の見直しに取り組んでいる。ぜひビデオ検証型に取り組んでみたい。
- 授業への還元率が気になる。普通の授業にプラスとなる授業研究にするためには、もっと検討課題を絞って展開すべきだと思う。
- 他人事のような参加者をなくすためにも、全員参加型の工夫を考えれば、授業者の負担も軽減され、研究授業のやり甲斐も改善されると思う。

考察

紋切り型の展開に疑問を抱いたり、うんざりしている教員が多いのかもしれない。授業研究で取り組む改善点や獲得したい技能など、ねらいや目的意識を明確にもつことが肝要である。

5 模擬授業を主体とした校内研修の意義

(1) 多角的な効果

模擬授業を校内研修に導入することで、最も期待される効果は「資質向上」である。教師は模擬授業を実践したり、体験したりすることで、個々の意識が高まり、意欲化が図られる。また、教師としての資質が高まると同時に、教授法の工夫や改善、向上などが期待できる。同時に、大抵が同僚と取り組むケースが多いので、指導内容の検証や改善が期待できる。教師間や教科、学年、校種間などの情報交換も期待することができる。

このように、教師個々を高めると同時に、コミュニケーションの活性化や教材分析の充実など、多角的な効果が期待できる。これらの効果を

まとめると、表3のように整理できる。

- | |
|------------------|
| ① 教師自身の意欲化や資質向上 |
| ② 教材研究等の深化 |
| ③ 教師間、組織間等の情報交換 |
| ④ 校種間の連携推進 |
| ⑤ コミュニケーション能力の向上 |

表3 模擬授業の導入で期待できる効果(1)

さらに、模擬授業はPTAの授業参観や学校説明会、体験入学など、PRや啓発活動の手法としても活用できたり、保護者等への教育の現状や実態などの説明等にも効果的に活用することが期待できる。そのような間接的効果を表4のように整理することができる。

- | |
|---------------------|
| ① デモンストレーションによるPR効果 |
| ② 学校説明等の啓発活動 |
| ③ 体験入学等における進路指導 |
| ④ 保護者や地域社会に果たす説明責任 |

表4 模擬授業の導入で期待できる効果(2)

(2) スキルの向上につながる模擬授業

模擬授業のほとんどが、教師同士で取り組む活動なので気心が知れており、授業者のスキルの長所や短所を発見しやすい。また、取り扱う内容にも相互が精通しているので、確認や繰り返し活動が容易に短時間で消化することが可能である。本来、模擬授業は本番の授業を想定しながら試行錯誤を積み重ね、最上の手だてや発問などを模索する活動なので、授業者にとっては授業イメージを抱きやすく、リズムのある理想的な授業設計を具現化する最大の試行と言える。児童生徒役の教師も子ども目線で授業内容を確認するので、日頃の授業では気付けない授業展開の改善点を見出したり、発問やワークシートなど子どもの立場に立って最もふさわしいアイテムの着眼点をもてたりするなど、模擬授業の効果は大である。

さらに、本物の実態についても共通理解されている場合が多く、そうでない場合でも、情報を提供すれば、実態に即した状況やターゲットとなる児童生徒の役割分担などが可能となり、阿吽の呼吸で実態に即したり、個に応じた指導の工夫が実

現できたりするのである。

(3) 模擬授業の5つの型の関係

ア それぞれの型における目的等の位置関係

前述のとおり(P2参照)、「比較・検討型」は、複数の参加者が研究テーマや題材などに基づき、指導案(略案)や関係資料などを持ち寄り、比較・検討することで共通点や相違点などを検証したり、そこからとらえた気づき等を基に、意見を交換したりするわけだが、持ち寄った略案等の中で、事前に課題が確認されているか、否かで、その働きや役目は異なってくる。

たとえば、事前に課題が設定されていれば、その授業研究の課題はすでに焦点化されているので、比較・検討の目的は「課題の深化」となる。逆に、課題を模索するための比較・検討の活動であるならば、その目的は「課題の模索」であり、「課題の焦点化」を目指すためとなる。

比較・検討型を例に取り上げて目的の2面性を説明したが、この現象は「部分検証型」や「ビデオ検証型」、「多視点追究型」でも同様である。事前に課題を模索し、焦点化させるための部分検証やビデオ検証、多視点追究の活動なのか、課題を深化させるためのそれぞれの活動なのかという違いとなる。

以上のとおり、4つの型は課題の把握の有無で、目的に二面性をもっているのである。

イ 研修の中核となる「課題焦点化型」

5つの型の中で、1つ異なる型が「課題焦点化型」である。課題焦点化型は、事前に課題を把握し、活動の当初からそれに焦点を当て、深化させていくことが目的となる。

ゆえに、アで述べた4つの型の二面性の中で、課題を模索して焦点化するという特性は、「課題焦点化型」へ導くための過程で活用できる手段の型と言える。

一方、課題を深化させるという特性は「課題焦点化型」を発展させる過程で活用できる手段の型と言える。

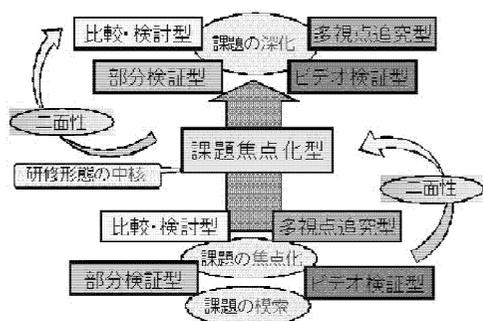


図1 5つの型の関係

図1のように、授業研究のスタイルを検討する際に課題焦点化型を中心にとらえ、それを深化させたいのか、それとも課題を明確にしたいのかを検討し、授業内容や実態、参加者などを考慮し、二面性をもつ4つの型のどれを活用すべきかなどを検討し、最もふさわしい型を選択することが望ましいと考える。また、1つの型に固執するのではなく、状況に応じて臨機応変に複合させたり、プロセスに応じて変化させたりしながら活用することが望ましい。

6 実用化を目指した模擬授業の実践

(1) 「教育実践オープンセミナー」での検証

平成20年8月、本学部附属教育実践総合センターは、鹿児島県教育委員会と独立行政法人科学技術振興機構（JST）と共催で、「教育実践オープンセミナー」を開催した。このセミナーは学校現場における喫緊の課題を取り上げながら、すぐに役立つ手だてや最新の教育情報を提供することで、課題解決のための手掛かりを得るための研修を深めるとともに、教員の資質向上や教員研修の工夫・改善等に資することを目的として開催された。

その中に設定された模擬授業を取り入れた授業研究は、小学校算数、中学校国語、中学校英語の3教科について、以下のような内容で実施した。

【開催日時】

平成20年8月27日（水）13:00～

【会場】

鹿児島大学教育学部第1・2講義棟

【国語科（中学校）】

- 1 授業者 鹿児島市立伊敷中学校
竹下直大 教諭
- 2 指導助言者 鹿児島市立谷山中学校
柿木正敏 校長
鹿児島大学教育学部
隈元浩二郎 教授
- 3 教材名「対話を考える」（三省堂）
- 4 単元
「日常生活に生きる話し言葉を探る」

【算数科（小学校）】

- 1 授業者 鹿児島市立桜丘東小学校
上原康弘 教諭
- 2 指導助言者 鹿児島県教育庁義務教育課
末満一二三 指導主事
鹿児島大学教育学部
植村哲郎 教授
- 3 題材名「計算のきまりを使うと」
(計算法則のまとめとその活用)

【英語科（中学校）】

- 1 授業者 鹿児島市立甲東中学校
伊堂寺朝美 教諭
- 2 指導助言者 鹿児島市立紫原中学校
四元光也 校長
鹿児島大学教育学部
濱崎孔一廊 教授
- 3 New Horizon English Course 1
UNIT 9 クリスマスがやってきた

(2) 課題焦点化型の検証

今回の取組では、学校現場の実用化の第1弾の実証として研修形態の中核に位置付けられた「課題焦点化型」のスタイルで検証することにした。これまでの2年間で大学教員が取り組んだノウハウを活用するとともに、現場の教員が取り組むことで生じるよさや課題等を見極めることで、他の4つのスタイルの二面性の関わり方などを探る。

(3) 指導案の工夫

課題焦点化型のスタイルで授業研究に取り組むことを踏まえ、参加者が模擬授業の課題を即座に把握することができるように、模擬授業指導案の冒頭に「模擬授業のポイント」として記載した。

◆模擬授業のポイント◆

I 対話を通してコミュニケーション能力を身に付けさせる手立ての工夫
II 教えて考えさせる習得型学習の指導法の工夫

国語科模擬授業指導案

期 日 平成20年8月27日(水)
13:00~13:50
会 場 教育学部第1講義棟22号教室
授業者 教諭 竹下 直夫

1 単元 日常生活に生きる話し言葉を探る 教材名「対話を考える」

2 単元について
日常生活において、私たちは話すことでコミュニケーションを円滑にしてはいるが、普段から「話すこと」の意味を考える機会が豊富にあるとは言えない。また、知識基盤社会といわれる現代社会において、「すべてを話さなくても分かってくれるだろう」という考えは通用しない場合が多い。さらに、中学2年生という年齢段階は、ともすれば話すことの難しさから、さまざまな場面で人間関係の構築を苦手とする傾向が見える。しか

図2 国語科模擬授業指導案

I 計算法則についてまとめていく際の課題(教材)の工夫について
II 新学習指導要領でも重視されている算数的活動のあり方について
III 新学習指導要領でも重視されている日常の言語をはじめ、数、式、図、表、グラフなどを用いて表現したり、説明したりする学習活動のあり方について

第6学年算数科模擬授業指導案

日 時:平成20年8月27日(水)
会 場:第1講義棟101号教室
授業者:鹿児島市立坂ヶ丘東小
教諭 上原 弘

1. 題材名 「計算のきまりを使うと」(計算法則のまとめとその活用)

2. 題材について
(1) 題材の位置とねらい
この学習をする子どもたちはこれまで整数や小数の四則計算の学習を通して、計算の仕方と考えたり、その計算の確かめをしたりする中で、交換法則・結合法則、分配法則などの計算のきまりを学習してきた。
ここでは、その適用範囲を分数計算まで拡張し、計算法則を統合的にとらえさせ、その理解を深めさせるとともに、具体的な場面で活用する力を育てたい。
新学習指導要領においても、低学年や中学年で素地的に学んできた計算法則等について4年学んで整数の範囲でまとめ、5年学んで小数についても成り立つことをまとめるなどスパイラルに学習できるようにしている。

図3 算数科模擬授業指導案

◆模擬授業のポイント◆

I 問題解決的な学習の過程を取り入れた、且話し合いの場を工夫したりするなどの指導法の改善
II すべての生徒に学習活動の楽しさを実感させる指導法の工夫

英語科模擬授業指導案

期 日 平成20年8月27日(水)
13:10 ~ 14:00
会 場 教育学部第1講義棟22号室
授業者 鹿児島市立甲東中学校
教諭 伊波亨 朝美

1 題材 New Horizon English Course 1
UNIT 9 クリスマスがやってきた

2 題材について
(1) 題材のねらい
生徒は、これまでに「目・動詞を用いた現在形の文」や「一般動詞を用いた現在形の文」などの学習を通して、簡単な3語~5語程度の英文で自分のことや他人のことが表現することができるようになってきている。
そこで、本単元の柱となる言語材料の「現在進行形の文」を、それぞれの使用場面で運用することができるよう導きたい。また、身の回りのことから段階的に自己表現させ、繰り返し練習する機会を設けることで、さらに自己表現の幅が広がると考えられる。
本課は前単元からの流れで、カナダに到着した観光客たち4人について扱っている。観光客たちはよいよトロントにあるグリーン家に到着し、滞在することになった。
Part 1はクリスマスの目撃者。グリーン家ではリサと清司、マイクと儀、絵美、ジュディ、ベル。そして、グリーン家で働いている夫のこのの様子を描写している。
Part 2はオーストラリアからグリーン家に届いたクリスマスカードを通して、北半球と南半球のクリスマスの違いについて説明している場面である。ここでは、サンタが海で泳がけられている。そして、夏のサンタに驚く前に、マイクが違いについて説明している。
Part 3はカナダ国内で暮らすをむるリサと清司夫妻が、「シカの飛び出し注意」の道路標識に出くわす場面である。

図4 英語科模擬授業指導案

このように、最も目に付くところに焦点化を図りたいポイントを記載したことで、司会・進行の担当者も、すぐに焦点化して時間の無駄なく課題

に迫ることができた。また、授業者も反省等を紋切り型に語り出すことなく、本題の課題について意図的に反省や気づきを話すことで、参加者も同じ課題意識をもって授業研究に参加することができた。



図5 算数科授業研究

7 おわりに

今回は、過去2年間の授業研究を主体とした校内研修の在り方について考察したが、その意義や取組方など、糸口となる関わり方が見えてきた。しかしながら、今回はセミナー開催時期の都合により、授業研究の分析・検証までは至らなかった。十分吟味の上、次号で結果等を報告したい。また、「2(3)模擬授業の実用化」で示した継続研究の積み残した項目についても研究に取り組み、合わせて報告したい。

今後、教員研修の実用化に向けては、現場の先生方との協働が欠かせないことを肝に銘じて積極的に取り組む覚悟である。

引用・参考文献

- 1:平成18年度 文部科学省委託事業「協働的授業研究に焦点化した教科指導力向上研修プログラムの構築」成果報告書 平成19年3月22日 鹿児島大学
- 2:平成19年度 独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業『授業改善能力』と『研修指導力』の向上を検証可能とする『検証・評価一体型基礎学力向上研修モデルカリキュラム』の開発」成果報告書 平成20年3月1日 鹿児島大学